



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	田村一郎「十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」：自律への不安(上)」
Author(s)	柏葉, 武秀; Kashiwaba, Takehide
Citation	哲学, 35, 113-119
Issue Date	1999-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48004
Type	departmental bulletin paper
File Information	35_113-119.pdf



《書評》

田村一郎 『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」』
——「自律」への不安（上）——（多賀出版）

柏葉武秀

本書はその表題からして問題含みである。十八世紀ドイツ思想と秘儀結社を結びつけて論じること自体が、その内容上の当否を問う以前に、申し開きを要すると思われるからである。しかも十八世紀ドイツ思想とは主としてカントとフィヒテの思想であり、秘儀結社は具体的にはあのフリーメーソンリイであるとなれば、そこに何か哲学史・思想史上のスキヤンダルを期待してしまうかもしれない。だが、本書の主題はむしろ副題ともなっている「自律への不安」にある。つまり著者が前著『ドイツ観念論における「自律思想」への展開』（北大図書刊行会、一九八九年）で跡づけた、カント、フィヒテ、ヘーゲルといったドイツ観念論の代表的哲学者の思想における自律への希求のいわば裏面を、ドイツロマン主義も含めた十八世紀ドイツ思想に探っていくのである。

「自律への不安」とは、著者の言葉をひくならば「はたして人間は『自律』的存在なのか、ほんとうにその『自律性』に期待をかけてよいのだろうか」（九頁）との「不安」を意味する。この不安にとりつかれていたからこそ、ドイツ観念論の「極端な『自律』へのこだわり」（七頁）が生じたと著者はいう。ではかかる不安を払拭するために、哲学者やロマン

主義者はいかなる方途を模索したのか。本書の挑発的な解答は、「秘儀結社」こそが「自律への不安」の解消策のひとつであったというものである。十八世紀ドイツ思想と秘儀結社とが自律をキーワードにして出会うことになる。以下その内容をかいつまんで紹介しよう。

まず序論では、「秘儀結社」一般の概念規定から様々な結社（有名なものではテンプル騎士団やバラ十字団）の形成史が、内外の文献を利用しながら手堅くまとめられている。その中で紹介に値するのは、なんといつてもフリーメーソンリー (freemasonry) (「フリーメーソン」との呼称は不正確とのこと) であろう。構成員たる「メーソン」と個人的に接触する機会も経験もほとんどないはずの日本では、あるいはそうであるからかもしれないが、なぜか国際的陰謀組織の代名詞のように取り上げられがちなフリーメーソンリー。だが、それはもともと中世来城や教会などの大建築物を建造する「石工 (mason)」のギルドであった。石工の相互扶助を目的とした結社であったフリーメーソンリーは、十六世紀ごろから石造り大建築の需要が減少したこともあり、徐々に知識人を受け入れて思索型組織の色彩を強めていく。それと平行して古代の秘儀や諸思想が流入し、また組織の起源を伝説化する試みも行われていく。十八世紀に至ると、フリーメーソンリーは宗教的争乱の類発するイギリスで「宗教的寛容」を掲げて、組織的には一七一七年「ロンドン大ロッジ (ロッジとは集会場あるいは支部のこと)」を結成、その掟としては一七二七年「アンダーソン憲章」が起草され、ヨーロッパ活動の柱が確立した。以来フリーメーソンリーはイギリス全土にとどまらず、ドイツ、フランスへと拡大、各地でロッジが設立されていく。現代でもアメリカを中心に六百万人も結社員がいるという。

近代フリーメーソンリーの中心思想は「古き義務」たる「アンダーソン憲章」に盛り込まれている。その内容は、宗教上の寛容・コスモポリタニズムと帰属する国家の法律への服従からなる。だがなによりフリーメーソンリーは人間存在の最高度の完成を目指す思想集団でもあった。「みずからの導き手としての『天地の建築士』という独自の神を信じ、「道徳

的義務」を實踐し、「兄弟愛の絆」を重んずることで人と人の結びつきの中心となる」（四二頁）というのがその思想的核心である。肝心の十八世紀ドイツのフリーメースンリイは、当時の思想界での神秘的・非合理的な傾向と合理的・啓蒙的傾向とのあいだで動揺しているのだが、興味を持たれる読者には詳しくは序論最終部を参照してもらうことにして、本編の紹介に進みたい。

第一編「カントと『秘儀結社』」は興味深いエピソードからはじまっている。カントの肖像画がケーニヒスベルクのあるロッジに飾られていたというのである。肖像画がロッジに飾られるに至った経緯はともかく、カントその人はメースンではなかった。それにも関わらず、メースンはカントの肖像画を有することを誇らしく思い二十世紀に至るまでそれを掲げていた。この事実はフリーメースンリイがカントの思想をなんらかの意味で高く評価し、みずからの思想との親近性を感じていたことを示唆している。実際、フリーメースンリイの側からは、その道徳観、宗教観からカント哲学の体系そのものまで立ち入って、組織の理念の基盤として受け入れてきたことを著者は明らかにする。またカントのケーニヒスベルクでの知人にはメースンが多かった。たとえばカントと直接の交流があったものとしてはヘルダーとフィヒテがそうである。だが、その一方でカントは生涯フリーメースンリイをはじめとして秘儀結社を避けてきた。著者はカント自身の秘儀結社についての発言を書簡や小論文から丁寧にひろいあげ、またメースンであったり他の秘儀結社参加者たち（たとえばスヴェーデンボルク、ヘルダー、ヤコビ、フィヒテなど）へのカントの論評をも渉猟して、メースンのカント評価は結局は「片思い」であったことを論証する。

フリーメースンリイに限らず、およそ秘儀結社はみな独自の宇宙観を持つが、構成員がそのような宇宙観なり世界観を獲得するには、どうしても一種の信仰のごとき感情が必要である。言いかえるならば、結社に心底帰属するためには理性的な推論だけでは不足であって、世界を統べる原理を直観できなくてはならない。「すくなくとも『秘儀結社』に共鳴す

るためには、なんらかの形で「直観」重視がなければならぬということである」（一八三頁）。人間の自律性の根拠をひとえに理性に求めるカントが、啓蒙主義的メーソンに一定の評価を加えながらも、総じて秘儀結社を否定するのは、理性の枠を越えた直観（たとえ「知的」を自称しようとも）に依拠するその根本的態度を許容できなかったからである。

だが事情がかくのごときであるならば、直観を重視する哲学者や思想家は秘儀結社に接近しやすいということにもなるだろう。自身がメーソンであったファイヒテがまさにこの実例となる。第二編「ファイヒテと『秘儀結社』」で著者はファイヒテとフリーメーソンリイとの関わりを、ベルリン時代以前の個人史から説き起こし、ロッジでのファイヒテの講演テキスト「コンスタントへの手紙」をも利用して明らかにしている。この講演テキストについての諸家の解釈やその他のファイヒテの著作との関連にも相当数の頁が割かれているのだが、そのいちいちを論じるのは評者の手に余る作業なので、ここでは「人間の使命」（一八〇〇年）だけをやや詳しく紹介しておきたい。この著作からは「自律への不安」とファイヒテのフリーメーソンリイへの傾斜との哲学的関係が比較的読みとりやすいと思われるからである。

「人間の使命」は三編構成からなる。第一編「疑い」では因果律に支配されつくした「自然の体系」と人間の思惟と意欲の自由からなる「自由の体系」の二つの立場がそれぞれ表明された上で、それらが「アンチノミー」に陥ってしまう次第を述べる。第二編「知識」は、著者によるとカントの「純粹理性批判」の展開に対応している。第一章「直接的自己意識と感覚」は「純粹理性批判」の「感性論」に、第二章「対象意識の成立過程」と第三章「知識の客観としての知性と空問」は「論理学」に相当する。

ところで、一七九〇年代「知識学」の段階でファイヒテは、カントのいう感覚や思惟を「私のもの」として統一性を付与する「超越論的統覚」を「知的直観」としてよみかえていく。知的直観はさらに内的なそれと外的なそれとに区分される。「内的」直観とは自我の統一性を自覚するものであるのに対して、「外的」直観とは感覚対象を把握する。ファイヒテにおい

ては、感覺対象の認識もそれに関わる直接的意識のあり様であることになり、つまりは一種の自己理解にすぎないからである。この立場は「人間の使命」にも用語法として散見されるのだが、それは哲学的な主張の開陳ではもはやなく、逆に批判対象となっている。第四章「知識のむなしさ」は「第一批判」の「弁証論」にあたるのだが、そこでは「知的直観」という言葉自体が批判されるために召喚されている。フィヒテによれば、外部の対象認識も自己意識も同じ自我の意識が内的に向かうか外的に向かうかの違いでしかない。「ということは内なるものも外なるものも同一の意識の変様にすぎず、なんの実体もたない『模写』なり『像』にすぎない」(二六六頁)。一七九〇年代のフィヒテはこういった自己理解や世界理解をこそ「知識」と信じていた。だが、それは単なる錯覚、あるいは夢にすぎないのではとの疑念を「人間の使命」でのフィヒテは禁じ得ない。つまりもはや彼はかつての「知識学」の立場を放棄せざるをえなかった。あるいは理性なり直観に基づく「知識」そのものを。そのかわりにフィヒテは、信仰へと跳躍する。

第三編「信仰」で説かれているのは、要するに「知識に対する信仰の優位」である。「知識」によって絶対確実な根拠を探し求めてみたところで、行き着く先も定かではない果てしない彷徨を繰り返すのみである。「人間の使命」への確信を与えてくれるのは信仰をおいてないのだ。信仰の内実たる「良心の声」についての議論は割愛してよいだろう。フィヒテと秘儀結社とのつながりを総括するためには、これまで紹介してきた概要を知るだけで十分である。

著者によれば「人間の使命」でフィヒテは一七九〇年代の自我あるいは「個」を重視する立場を放棄した。さらにいえば、カント以来の自律への渴望がフィヒテの哲学によっては満たされえないことを自覚した。それゆえフィヒテは彼の思想の軸に信仰を据えたのである。だがもともとフィヒテにとっての神は、ある種の道德的秩序であって、概念的には一神論的というよりは汎神論的なものであった。したがってフィヒテがその信仰を仮託できるのは伝統的な教会ではなく、「みずからの『汎神論』的立場を許容し、早くからの『文化的自由・平等』の欲求にも応えてくれる格好の組織」(二七一

頁)であるフリーメースンリイだったのである。フィヒテはみずからの理想である「人間性の全的完成」を目指す教育機関としてフリーメースンリイのロツジを捉えていた。現実のロツジがフィヒテの期待に応じるものでなかったことは、彼が所属するロツジを最終的には追われる身となつた事実が示している。だが、理想化されたフリーメースンリイに希望を託すことをやめなかつたフィヒテは、みずからを「永遠のフリーメースン」であると生涯信じてることになつたのである。フィヒテの哲学的立場の変遷が、フリーメースンリイ(たとえ過大に美化されていたとしても)へのコミットを要請したといえるだろう。

本書のモチーフを典型的に表現するのが、以上のフィヒテとフリーメースンリイとの関係である。すなわち、「領邦」の寄り合い所帯にすぎない十八世紀「ドイツの惨めさ」を観念的に克服しようとしたドイツ自律思想は、自身の起動力でもあつた「自律への不安」を、あるものは哲学によつてまたあるものは文学作品によつて克服しようとしたのであるが、たとえばフィヒテにとつてはその哲学の行き詰まり(少なくとも主観的には)のゆえにかなわず、哲学や思想の補完物として秘儀結社に傾倒していくのである。おそらくドイツの思想家たちは、思想的発展としてこの転変を捉えていた、いやむしろ彼らの思想の表現をこそフリーメースンリイにみてとつていたのである。

ここまで本書の内容をほぼ忠実に紹介してきた。評者の中途半端なコメントを付すよりも、その方が本書の書評にふさわしいと考えたからである。とはいへ、最後にひとつだけ感想を述べさせてほしい。自律という理想が破れて秘儀結社へと赴くというストーリーは、それだけを本書の文脈から離れて切り出してみると、今日の日本においてわれわれが眼にする悲喜劇に構造上同型であると思う。本書のいう「自律」は、その骨格だけであれば戦後日本の思想的パラダイムでもあつたように思われる。いわゆる戦後民主主義が、権威への盲従を脱し、教養を積んで人格を陶冶し、理性的判断を自前で下せるように従へてきた、その意味で自律を理念としてきたことは疑いえないだろう。だが、高度に発達した消費

社会となった現在の日本で、しかもポストモダンニズムなる思想的流行を八〇年代に経験した今日、もはや戦後民主主義の理念は失墜した。少なくとも、理念はあくまでも建て前にとどまるのであって、当然にも現実化するわけではないという認識が自明となった。そこに生じた空白を埋めたのが、九〇年代猖獗を極めた新・新宗教やオカルト・ブームであったのは記憶に新しい。フィヒテに典型的な自律の不安を結社によってうち消そうとする試みのうちに、こういった現代日本の構図を重ねて読み込む誘惑を私は禁じ得なかつた。フリーメーソンリイが決していかがわしい団体ではないという事は、まさに本書によって蒙を啓かれる思いで再認識している。だが、ドイツの思想家たちは多かれ少なかれ現実のフリーメーソンリイを理想化しては裏切られている。そうであるならば、詐欺師まがいの連中に帰依してしまう人々を笑うことはできまい。早期の刊行が待望される下巻においては、このようなおそらくは的外れな危惧が少しでも払拭されることを期待したい。